

# 生人形絵番付『西國順礼靈験記』とその周辺

—— 関連資料をめぐって ——

牧 野 和 夫

はじめに

明治初期から大正に係る西國観音霊場の信仰を考察する  
うえで、縁起・凶絵・生人形を収集の場で支えた京都集古  
会々員・浪華趣味道楽宗々員などの活発な活動があったこ  
とは看過できない。

かつて『西國三十三所巡礼記』研究史の『空白領域』  
― 集古会 ― 生人形 ― とその周辺 ― (『巡礼記研究』第  
4集(2007・9))と題して大正・昭和期の趣味家の、  
とくに集古会・浪華趣味道楽宗を例に西國巡礼関連の蒐集・  
展観の様子を拾う試みを中世文学研究の立場から行った経  
緯がある。趣味家の収集品などの整理・分析を通して、納  
札・千社札の研究史の側面からその一端を展望してほぼ終

えた。明治初前期の西國三十三所巡礼信仰の直面した神仏  
分離期という空白期に実は三十三所信仰の爆発的な昂揚の  
場を提供したものが松本喜三郎の『生人形』を看板にした  
全国主要都市での興行(観音霊地での興行・賽銭の降るこ  
と雨のごとし)であったことを興行の冊子型絵番附の刊  
印・修の多様さから明らかにできないか、という密かな想  
いもあった。しかし試みは、家蔵の明治十三年四月刊『西  
國順礼靈験記』(仮綴小一冊の簡単な紹介に止めざるをえ  
なかつた。ここに若干の家蔵資料を加えて従来信仰史・  
研究史の一端に検討を加え、併せて大正期の趣味家の活動  
の一隅に繋げてみたい。

一、家蔵奥付ナシ「國政筆」『西国順礼靈驗記』  
一冊の紹介

昭和六年五月二十四日刊『西國三十三所巡禮に関する目録』（編輯 田中緑紅 発行所 有楽会）は、二十四・五の両日京都北野の宮脇（賣扇翁、京都集古会会員）氏邸で開催された展観の目録であるが、生人形関連の絵番附が二点著録されている。「一八 西國順礼靈驗記 小一冊（松本喜三郎編／國政画）（明治十二年一月廿六日／大阪 田中文次郎） 同（牧野注・田中緑紅）氏蔵」「二三九（生人形／絵番附）西國三十三所観音靈驗記 一枚（松本喜三郎作／久保田桃水画）（明治十二年九月／新京極ニテ興行）（杉浦丘園氏蔵／田中緑紅氏蔵）」がそれである。一八は、従来の研究史において寡聞にしてその現存の情報（二月廿六日刊冊子型絵番付）を得ていない（ちなみに杉浦丘園・田中緑紅も京都集古会会員）。

現在も多くの課題を残した領域であるが、若干の解明に向けて、ここに一点の資料紹介を試みる。

家蔵

『西国順礼靈驗記』

刊一冊

表紙・楮紙共紙（一七・七×一一・〇） 上方右より「西

國／順禮／靈／驗／記」（振り仮名「さいこく／しゅんれい／げん／き」）中程から下方にかけて順礼の男女描く。左下「國正文（政）筆」と。

見返し・単枰（隅落し）内、上方に「世（振仮名「よ」）をてらす／仏（「ほとけ）」のしるし／有（「あり）」ければ

／また／ともし火（「ひ」）も／きえす／ありけり」、下方に笠・柄杓などを描く。

序・単枿（一四・八×一〇・〇糶）内、無界、八行々十八字内外、初行「人皇（附訓）「にんわう」」六十五代花山法皇（「くわさんのいんほうわう」）は佛道（「□つだう」）に御帰依（「きえ」）。

跋・単枿（一五・一×一〇・〇糶）内、無界、七行々十七字内外、初行「生木偶細工人（「いきにん□□さいくにん」）松本氏は肥後國熊本（「ひごのくにくまもと」）の産（「さん」）」。

本文以下、単枿内、上文下図（横単界線を以て分かつ）界高などは区々で詳細は別紙。計十八丁。版心・黒口・柱題・丁付けなど一切なし。

「國政筆」と銘うたれた、この冊子型絵番附は、通称「東京版」と仮称されてきた一冊である。しかし、「國政筆」と銘うたれた冊子型絵番附の多く（「浅草奥山興行版」は、今後の課題として残る）は、大阪千日前興行を当て込んだものであり、家蔵本も前跋（跋の位置は、作為による）に「大坂千日前におる□（文字磨滅）／興行なし」とあり、明らかに通称するところの「大坂版」である。該当箇所も入れ木の修ではなく板木一板分の補刻葉である。

図3は、序の裏半丁の前跋と本文冒頭（2オ）であるが

(いずれも同質紙を入紙)、跋は磨滅甚だしく、文章が消えており判読不能な箇所が目につく。刷印時点の版木の状態が悪く、明らかにかなりの量の刷印の後に刷られたことが知られる。五行目「細工ハ一流無類の仕組大坂千日前にお  
る□(空格)」とあり、表紙に東京の錦絵師四代「國政筆」と銘記されるが、大坂千日前の興行に際して活用された絵  
番付であることが明瞭である。

また一見して明らかながある。毎丁の詳細な採寸を記した書誌情報を観察すると、些少な数値ではあるが容易ならざる相違に気づく。さらに印面の磨滅の度合いが微妙に異なるもの、相互に歴然と相違のあるものなどが混在している。当然予想されることであるが、幾次かに亘る補刻葉の痕跡が認められるのである。顕著な例を書影で示す。



図3見開きの如く右の跋と左の⑬番札所・2オ、図4の右①番札所・2ウと左②番札所・3オと各々の印面は磨滅の度合いなど明瞭な相違があり、図5・図6の見開きもまた、左右の印面の違いは際立っている。とくに図6⑬番・8ウ「石山寺」は印面清爽、最も新しい補刻葉か、と推測される。図の構成も上文横枠を女性の頭が突き破るなどは周重画・政田屋板の錦絵と同じ趣向（他の版種には認められない）で興味深い。これらの印面の相違に版式の眉上高さや単辺枠内の界高などの数値上の差異を加えて示せば、次のようになる。

札所順番	丁数	眉上高さ	界高	脚欄	上段
序	一表	一・八糶	一四・八	〇・八	
跋	一裏	一・三	一五・一	一・〇五	
⑬	二表	一・七	一五・〇	〇・九	五・五
①	二裏	一・八五	一五・〇	〇・七	五・五
②	三表	一・三	一五・一	一・〇五	五・五
(中略)					
⑪	七裏	一・三	一五・〇	一・三	五・五
⑫	八表	一・九五	一五・一	〇・四五	五・五
⑬	八裏	二・一	一四・八五	〇・四	五・五
⑭	九表	一・七	一五・〇	〇・九五	五・五
⑮	九裏	一・八	一五・〇	〇・八	五・五

⑬	十表	一・三	一五・二	一・〇五	九・六(絵)
⑭	十裏	一・八五	一四・八	〇・八	五・四
⑮	十一表	一・三	一五・一	一・〇五	五・五
⑯	十一裏	一・三	一五・一	〇・九	五・五

いずれも、当初の刊行時の板木に拠る刷印とは考え難く、多くは幾時にも亘る補刻葉（覆刻などに拠る板木、いわゆる「修」）に拠る刷印を物語っているようである。左⑮番札所印面（比較的新しい葉）に比して印面の磨滅甚だしい⑯番札所「清水寺」・10才などは、原刻葉の可能性も残すとも思われるが、後述の如く跋と併せた二面一板である故、大阪千日前興行の際の比較的早い頃の板木に拠る刷印である。しかも料紙の色・質を異にしている（撮影時、いずれも同質紙を入紙）。おそらく、刷り置きが残った丁の料紙と刷りましの丁の新しい料紙などを混在させた故であろうか。この視点に立脚した検討を加えた上に新たな「事実」を加えるならば、次の諸点が明らかになる。

その「事実」とは、図7の10才・⑯番札所「清水寺」と図8の10ウ・⑰番札所「六波羅蜜寺」は、袋状の一枚一紙二面に刷印されたものではなく、各半丁分一紙を版心部分（実際は綴じ代ノド部分）で糊づけし、袋状に仕立て直したものである。10才左端0・5糎幅糊付け箇所が入紙でき

項の採寸表を見れば、版式がまさに一致し、印面の磨滅具合もほぼ同じ、色・質同じ料紙なのである。

札所順番	丁数(現状)	眉上	界高	脚欄	上段
序	一表(一オ)	一八糎	一四・八	〇・九	
⑬番	一裏(10ウ)	一八五	一四・八	〇・八	五四(文)
⑭番	十八表(10オ)	一三三	一五・二	一〇五	九六(絵)
跋	十八裏(10ウ)	一三三	一五・一	一〇五	

以上が家蔵冊子型絵番附の重要な事実である。この事實は、次のような冊子型絵番附の存在を推定可能にする。冒頭以下、②番「三井寺」まで、札所順番・丁数で示すならば、「序 一表」「⑬番札所(六波羅蜜寺・見開き右)

一裏」「⑭番札所(六波羅蜜寺・見開き左) 二表」「①番札所(那智山) 二裏」、「②番札所(三井寺) 三表」という順序になる。3ウ・③番「粉河寺」から9オ・⑭番「三井寺」、9ウ・⑮番「今熊野」まで札所順番通り進むが、次の10オ・10ウには⑮番「六角堂」・⑯番「革堂」が配されて、17オ・32番「観音寺」、17ウ・33番「谷汲寺」と札所順に来て、最後の18オ・⑰番「清水寺」が配され、跋が18・ウに置かれる。途中、⑰番「清水寺」と⑱番「六波羅蜜寺」(見開き二面)が抜けて首尾に配置される他は、札所順番通りに並ぶ。

この順で進行する『西国順礼靈驗記』が既に報告されて

ず、縦に暗い部分として残る。

このような糊付けした丁が、先立って書影を掲げた序・1オと跋(と推定)・1ウにも認められるのである。他はすべて一板一紙二面刷印のものを版心の真ん中で折つたものを綴じた、いわゆる袋綴じ装の形態を採っている。

このことは、次のごとき解釈を導く。すなわち、1オ序は⑰番札所「六波羅蜜寺」・10ウと一板一紙二面の右(1オ・序)・左(1ウ・⑰番札所「六波羅蜜寺」)に該当し、同じく1ウ跋は一板一紙二面の右(18オ・⑰番札所「清水寺」)・左(18ウ・跋)に当たる。前に表記一覧を示した各書誌事



いる。西田耕三氏ご所蔵の「小冊子」二点のうちB本で、以下の紹介がある。「もう一本（B本とする）には奥付がない。表紙の絵柄にも、順礼の旅道具の絵にも、西国三十三所順礼の由来の文章にも、A本と小異がある。もつとも大きな違いは、三十三所観音霊験の順序である。B本は、十七番六波羅蜜寺の「空也上人」を冒頭で見開きに掲載し、十六番京清水寺の「熊野御前」を最後にもってきている。その間は普通の順序である。この順序は、明治四年の浅草での興行の番付（『生人形と松本喜三郎』179ページに写真が掲載されている）と同じである。十七番の「空也上人」が招きであったために最初にもってきたものである。うが、なぜ十六番が最後になっているのかはわからない。実際の興行がそういう順番になっていたのであろうか。B本は、浅草ではなく大坂千日前の興行時のものである。それは、「生人偶細工人松本氏は肥後熊本産にて」で始る跋文の中に、「大坂千日前におゐて興行なし」という部分があることからわかる。B本はA本と違って興行と一体の絵本と考えて不自然はない。」西田耕三氏「生人形の芭蕉」（『近畿大学日本語・日本文学』平成十七年刊）

西田氏蔵B本と家蔵奥附ナシ「國政筆」本との印面の関係については、西田氏論文に掲載の書影二点について比較検討できる。先ず⑫番「岩間寺」である。明らかに西田B

本が先行するか、と思われる。図9右の家蔵奥附ナシ「國政筆」本は、⑫番「岩間寺」に關しては別板であり、しかも最も新しい補刻葉と推定可能な八丁オ・ウである。八・ウ図については周重画・政田屋板の錦絵（「浅草金龍山奥山活人形の図」（『観物画譜』所収）を参考にしたかと考えられる点、前述の通りである（ちなみに同じ岩間寺の図を掲げる西田氏蔵A本は国会図書館蔵・家蔵など多くの伝本が知られるが、今回言及せず）。

⑤番「藤井寺」の掲載図は同板かと思われる。図9の家蔵奥附ナシ「國政筆」本の最も新しい補刻葉が⑫番「岩間寺」（8オ）であることを考慮するならば、図10の西田氏蔵B本が先行した形であろう。すなわち「十七番六波羅蜜寺の「空也上人」を冒頭で見開きに掲載し、十六番京清水寺の「熊野御前」を最後にもってきている。その間は普通の順序」のものが先行して刷印された、と考えられ、家蔵奥附ナシ「國政筆」本が補刻葉に変わり、後に手直しを加えた改装本ということになる。さらに、興味深い一点がネット上に掲載された。

表紙はかなり破損、補修。



右の図10・11は、古書肆フロイス堂のウェブサイトで(2017・11に入手)に提供された図で、单边枠左辺地辺の欠けはいずれも虫食いによるものである。

次頁の図12家蔵同図は明らかに同板で、観音の四周の空間に磨滅などに拠る印面汚れが家蔵本において進行している。詞章も磨滅が進み判読不可の箇所も多い(頁四三に拡大して比較図を掲出したので、参照願いたい)。

また、次頁の図13の如く提供された明治十二年二月八日刊本の序の書影から裏面に跋の左右逆文字(裏五行目頭「細工」「千」)が透けてみえる。单边枠も表裏ずれており明らかに各半丁分が別板(おそらく左端糊付け)と推定できる

ようである。⑫番札所「岩間寺」の図も提供されているが、家蔵奥附ナシ「國政筆」本と同図同板である。

奥附から明治十二年二月八日刊ということになれば、千日前興行を当て込んだ出版である。この明治十二年二月八日刊『西国順礼靈驗記』は、刷印・製本当初より、序・1オと跋（と推定）・1ウの各半丁、10オ・⑬番札所「清水寺」と10ウ・⑭番札所「六波羅蜜寺」の各半丁を糊附けた家蔵奥付ナシ「國政筆」本のような体裁の冊子として流布した（売られた）ものようである。家蔵本と明治十二年二

月八日刊本との刷印の先後関係は印面より判断して家蔵本が後の刷りであろう。

## 二、一枚刷・冊子型絵番附との相関性について― 千日前興行の場合

ここで千日前興行を挟んだ前後の一枚刷絵番付と冊子型の絵番付との関連について現在確認（一部の原物確認は今後の課題とする）できる範囲で対配関係に言及したい。

先ず一枚刷絵番付を整理すると、興行地で三類、各々別版で四種になる。

### ① 浅草奥山興行版

熊本松本家蔵

最下段一番右「第十七番京 六波羅蜜寺」、最上段一番左「第十六番 山城東 清水寺」、他は下段右から順に一番から六番まで、以下同じ。右端双行「當未正月九日より浅草奥山において興行仕候／西國三十三所觀□□ 大道具大仕掛に取仕：」

### ② 大阪千日前興行版

A 梅原忠治郎氏『西國三十三所順拜通誌』中卷(梅

原書店 昭和12年)所載。最下段一番右「第一番 紀州那智山」、最上段一番左「第三十三 美濃谷汲」。右端双行「當ル明治十二年一月吉日より南千日前に於て興行仕候／西國順禮三十三所觀音靈驗記」、下方欄外「玉亭芳峯」。左端下三段抜いて「一世／一代 百物天真創業工肥後熊本産松本喜三郎」

「左端单边枠外」明治十一年十二月二十日御届 編輯東京府下浅草区浅艸北東仲町第八番地 忝本喜三郎 出版人坂府第三大区西区新町通一丁目十一番地 田中文次郎(早

稲田大学図書館蔵による)。「あのかな」に高橋好劇(一時、生人形太夫本・浪華道楽宗開祖)執筆・図掲載。

B 浄国寺蔵

最下段一番右「第一番 紀州那智山」、最上段一番左「第三十三 美濃谷汲」。右端双行「(西國順禮／三十三所)觀音靈驗記」、下方欄外「桃水画」。左端下三段抜いて「(一世／一代) 百物天真創業工肥後熊本産松本喜三郎」左端欄外「明治十一年十二月二十日御届 編輯東京府下浅草区浅艸北東仲町第八番地 忝本喜三郎 出版人坂府下西区新町通一丁目十一番地 田中文次郎」

(興行地・月日を伴わない点、明治十二年二月の千日前の興行時と直接係らない可能性もある点注意を要する。)

### ③ 京都新京極興行版

牧野和夫蔵

最下段一番右「第一番 紀州那智山」、最上段一番左「第三十三 美濃谷汲」

右端双行「當ル九月上旬ヨリ新京極通四条上ル仲ノ町において興行仕候／西國順禮三十三所觀音靈驗記」、左端下三段抜いて「一世／一代 百物天真創業工肥後熊本産松本喜三郎」、左欄外「明治十一年十二月二十日御届 編輯東京府下浅草区浅艸北東仲町第八番地 忝本喜三郎 出版人坂

府下西区新町通一丁目十一番地 田中文次郎」、右欄外下方「桃(?) 水画」  
大阪城天守閣文庫にも蔵す。

冊子型絵巻付については、興行地で四類、現存本の装丁を含めた「外形」の細部の相違で可能性としては七種になるうか(版種ではない)。今後、さらに増加することが見込まれる。明治十四年以降に対象を広げれば、想像の域を越えそうである。

### ① 浅草奥山興行版

熊本松本家蔵

「前表紙に男女二人の、絵」「上部に「西国順礼靈験記」、左下「国政筆」と、見返し、巡礼笠装束。御詠歌なし。首に「十七番六波羅蜜寺／空也上人」、尾に「十六番 京清水寺／熊野御前」、跋「生人形偶細工人松本氏ハ肥後国熊本の産……浅草奥山におゐて興行なし、……」。

### ② 大阪千日前興行版

a 西田耕三氏(B本)蔵

表紙「の絵柄にも、順礼の旅道具の絵にも、西国三十三所順礼の由来の文章にも、」③と「小異がある」御詠歌なし。

首に「十七番六波羅蜜寺／空也上人」、尾に「十六番 京清水寺／熊野御前」、跋「生人形偶細工人松本氏ハ肥後国熊本の産……大坂千日前におゐて興行なし、……」。奥付なし。

b フロイス堂販売・ホームページ掲載書影に拠る

表紙に順礼姿男女二人の絵、上部に「西国順礼靈験記」、左下に「国政筆」と。西国三十三所順礼の由来の文章、首に第一番、尾に第三十三番、ご詠歌ナシ。前跋に「細工ハ……千日……」と左右逆字にて判読可能。奥附「明治十二年一月廿七日／同 年二月八日 出板／編輯人(東京府下浅草区／浅草北東仲町第八番地)松本喜三郎／出版人(大阪府下西区／新町通壺番地五丁目第十一番地)田中文次郎」

c 牧野和夫蔵

後刷りで補刻葉を混じた一本(首に一番「那智山」を置き、以下札所順に進み尾に「三十三番谷汲寺」でおわる。跋ナシ)。第一章の家蔵本書誌を参照。

a・b・cの三種は、基本的には同版である。

これに対して全くの別版が以下のものである。

d 国会図書館蔵

表紙に「洛東華山院」の前景を描き、外題なし。見返し、巡礼笠装束。御詠歌あり「へ……」。首に第一番、尾に第三十三番、跋「百物天真創業工松本氏ハ肥後国熊本の産……」(興行地ナシ)

奥付「明治十二年四月十一日御届／同年全月 出版／定價金三錢五厘／編輯（東京府下浅草区／浅草北東仲町第八番地）松本喜三郎／出版人（大阪府下西区／新町通壹番地五丁目第十一番地）田中文次郎／記者 内田正鳳／画工久保田桃水」。

後刷りに、西田耕三氏蔵（A本）・牧野和夫蔵（三色刷袋を表紙に仕立て改装）がある。

なお、参考として有楽会編『西國三十三所巡礼に関する目録』に拠る（昭和六年刊）ならば、「一八 西国順礼靈験記 小一冊 松本喜三郎編／国政画 明治十二年一月廿六日／大阪 田中文次郎 同 氏蔵」とある明治十二年1月26日刊の冊子型絵番付は、現在確認できず。同氏とは田中緑紅氏（京都集古会會員有楽会會員他）。

### ③ 京都新京極興行以降

牧野和夫蔵

表紙に石柱「花山法皇□落飾之道場」、寺院前景を描き、外題なし。見返しに巡礼笠と装束。御詠歌あり「仕切り単線／……」。首に第一番、尾に第三十三番、跋「百物天真創業工松本氏ハ肥後国熊本の産……」。この版の下図は②bの粗い覆刻か。

奥附「明治十三年四月六日／同年全月 出版／（東京府下浅草区／浅草北東仲町第八番地）松本喜三郎／編輯兼出版人 京都府平民／磯田栄助／（京都府下京区第拾九組／五条通寺町西入御影堂前町九百三番地）」

### ④ 興行地不詳

熊本松本家蔵

「明治十四年版冊子体番付は、細田明宏氏にご提供頂いた松本家蔵本の写真によれば、明治十二年大阪版冊子体番付に極めて近い。」頁51～52、と。確認していない。

明治八年四月三十日に、大阪では、大小区制を実施し、「玉亭芳峯画」の一枚刷りでは、「坂府第三大区西区新町通一丁目十一番地 田中文次郎」であったが、間もなく明治十二年二月十日、三新法に基づく郡区町村制が実施され、「久保田桃水画」の一枚刷りでは、「出版人坂府下西区新町通一丁目十一番地 田中文次郎」と改まっている。従って、「玉亭芳峯画」の一枚刷りは、明治十一年十二月以前に下絵を玉亭芳峯に発注し、翌年一月頃には既に刷印配布されていた予告版一枚刷りなのであろう。「久保田桃水画」の一枚刷りは、興行の始まった二、三月から興行の終いの六月頃までには刷印されたものであろうか。

一枚刷絵番付と冊子型絵番付との各図を比較してみる。スペースの都合で⑱番「六角堂」札所に限る。詳細は別な機会に比較するが、図のような対応を示している。

松本家蔵明治14年刊本（中前正志氏「近代池坊いけばな縁起追考」『女子大國文』143号所載の図版との比較で牧野が判断）は、さらに別版で家蔵明治13年4月刊本に図柄は酷似している。

結果として、大阪千日前での興行は、二月十日以前に配られた玉亭芳峯画の一枚刷絵番付と二月十日（八日刊とある）頃以降のある時期に刷られた、大阪の四条派即ち大和絵の系譜に連なる絵師「久保田桃水」の「画」と作る一枚



刷絵番付があり、それぞれに対応した絵柄を配した冊子型絵番付が刷られていたことになる（図14と15、図16と17）  
18や松本家蔵明治14年刊本。正確には図16に対応する（頭巾ナシ、花器対応）冊子型絵番付本は未だ紹介されず。今後に期待するのみ）。重要なことは、二月十日以前に制作された一枚刷が玉亭芳峰という上方の浮世絵師の手になるもので、図柄は東京の浮世絵師四代「國政筆」と銘打った冊子型絵番付（松本家蔵の一点を除きすべて大坂千日前乃至京極或いは四国などの興行）に対応可能な図様になっていることである。絵番付は補刻葉を混じえて複雑な伝本が存在する。首に「十七番六波羅蜜寺／空也上人」、尾に「十六番 京清水寺／熊野御前」を配した東京浅草奥山興行の際の巡礼配置に従ったものや同じ板木を使用して切り貼りの手間をかけて一番から順に配したものなどがあり、補刻葉などを含めればかなり複雑な展開を予想できそうであるが、手許の資料に乏しく今後の課題である。

図柄は人物などの髪型（明治九年出版とした「皇国貴賤／頭髮沿革図」などには「御一新前／西国の武家のあたま」などとして東京との異なりに留意している例がある）・着衣（京阪、京では西陣などがひかえる）、特に僧衣なども一変する。真宗系か、とも考えうる黒衣から図16の如く白衣へ、図17（新京極興行）以降の如くさらなる宗匠スタイ

ルへの変化は、看過しがたい重要なことからである。背景の立花図〔花器も含めて〕の変化も興味深い。明らかに明治十年の内国博覧会に立花・生花を出瓶した専正（その後専啓へ）などの神仏分離期に対する危機感をもった活発な活動やその立（生）花図（『専正生花集』）などの普及を髣髴させるところであろう。松本喜三郎と真宗や池坊

家との信仰上の交流については既に指摘がある。東京から上方へ転じた興行地の風俗習慣の変化に対応した絵師の交替並びに趣好への配慮（見物客の需めや京阪周辺寺院への配慮など）をみるべきか、と思う。谷汲観音の図に関して一例言及するが（参考に、明治十二年二月刊〈図21〉本と家蔵奥付ナシ「国政」本〈図22〉の観音像を掲出する）、個々の詳細な検討は別に稿を改めたい。

十二年九月予告の京都新京極興行用の予告一枚刷絵番付は熊本浄国寺蔵の一枚刷絵番付とほぼ同じ図柄で「桃水画」と銘打っている点はずかされる。家蔵の明治十三年四月刊の冊子型絵番付は、京都の絵草紙屋の磯田栄助が刊行しており、明らかに京都新京極興行後の西国三十三所案内として売られたガイドブック的な冊子なのであろう。絵はほぼ久保田桃水のそのままの転用（覆刻ではない。若干の相違に注意される）であるが、画工の名前はない。次頁図23は、熊本松本家蔵版木再活用火鉢の板木にて刷印（実印）したものである。「明治十五年」の「熊本の興行を終えて、（略）一世一代の大作である「西国三十三所観音靈験記」の人形は、遂に人手に売り渡すことにし、案内記の版木は火鉢にされた。」という。したがって、明治十五年頃以前の板木で、下図24に示す家蔵の明治十三年四月刊の冊子型絵番付のものと同板か覆刻であろう。

明らかに、谷汲寺に奉納された観音像（と同時期に二点作成、その内の一点浄国寺蔵）は、明治十三年四月に刊行された家蔵『西国順礼靈驗記』の図様（図24）に合致するのである。笠の色といい、笠から玉を垂れる様子といい、まったく同じである。裾模様の格子模様的一致にはとくに留意される。おそらく、板木再活用の火鉢のこの板木も、

明治十三年四月に刊行された家蔵『西国順礼靈驗記』の図を刷印した同じ板木の可能性も残る。明治十四年版を確認していないので確言はひかえない。浅草奥山興行版以降、笠は幾たびも変じており、重ねる衣（肌も透けるようなもの始まり）の襞の具合も変転して止まない。空も晴れ渡り、近景に橋を配した図は、明治十三年四月刊の京都の絵

草紙屋磯田栄助の手に係る「靈験一じるきを略して」綴り著した「小冊」に始まるか、とも思われる。多くの絵番付は薄暮か曇天に雪のちらつく雪景色で橋もなにも見えない光景であることを考えれば、おそらく京阪の一、二月頃の興行を当て込んだ図柄か、と想像してみるのも一興である（なお、初校時に気づいたことであるが、雪空、晴天の相違については、web上にも指摘がある。『見世物興行年表』〈blog.livedoor.jp/misemono〉参照。但し、版本学上の、刊・印・修が明確ではないことは残念である。）。

### 結びにかえて

以上のまとめとして、あえて憶測を加えて大坂千日前興行の輪郭の一端を跡付けてみたい。

既に「『西国三十三所巡礼記』研究史の〓空白領域〓」〓集古会〓〓生人形〓とその周辺―」（『巡礼記研究』第4集〈2007・9〉）に指摘して久しいが、興行に「合わせて刊行されたパンフレット・チラシ風な刷り物〓西国順礼靈験記〓」の刊行年表の空白を、特に大阪・京都の興行を中心に新たに埋めるべく努めたが、今後に残る課題は多いとした。

ここでは、冊子・一枚刷りのいずれも材料の乏しい浅草

奥山興行を一先ず置いて、大坂千日前・京都新京極興行に係る推測を行う。当初からかどうかは詳らかにしないが、東京浅草の興行の際に使用した人形を軸に衣装や道具類を含めた諸々を余り替えることなく興行する予定で、予告のビラチラシ一枚刷り絵番付を江戸の浮世絵師に直結する玉亭芳峯に下絵を依頼した。冊子型絵番付も四代目「国政筆」と銘打って改版（この点は確言できない）した。その際に跋「浅草奥山におゐて興行なし」を「大坂千日前におゐて興行なし」に改めた板木をおこし、首に「十七番六波羅蜜寺／空也上人」を見開きに（1ウ・2オ）に置き、尾に「十七番清水寺／熊野御前」（上図下文、双六などのアガリ）を配したもので、奥山興行の形式を踏襲したようである。予告ビラ一枚刷りは、しかし枠内地辺右より第一番、順に進んで枠内天辺左に第三十三番のアガリを配した、奥山興行と異なる一枚刷りとなった。この原因を類推する確たる資料はない。二月八日以降のある時点で、この一枚刷りと冊子型との齟齬を解消すべく冊子型絵番付に手を加えフロイス堂web掲載の二月八日刊絵番付や家蔵奥付ナシ「国政筆」本のような糊付け作業が試みられたようである。明治十二年二月十日以降のある時期、一月興行を謳った玉亭芳峯画に入れ替わるように大坂の四条派の絵師久保田桃水描くところの絵番付、すなわち熊本浄国寺蔵の如き一枚刷絵

番付が刷印されたもの、と思われる。家蔵の明治十二年四月刊の冊子型絵番付が刷られたのもこの頃であろうか。明治十二年の九月京都新京極興行を予告した一枚刷も久保田桃水画で、桃水画とある浄国寺蔵一枚刷とほぼ同じ図柄で同配置、おそらくはこの一枚刷に呼応した冊子型絵番付も刷印された、と推測できるが、現存を確認できない。家蔵の明治十三年四月刊の冊子型絵番付は興行時のものではなく、興行の興奮冷めやらぬ頃に格好の案内本として京都の絵草紙屋磯田栄助にて販売されたガイドブック風のものではないか、と思われる。

最後に附すことになったが、後に生人形の太夫本（三元）として大正二年頃まで興行に携わった浪華の高橋好劇について簡略に触れておきたい。高橋好劇は「太夫本の仕事をやめて西国巡礼の旅に出る」が、大正八年に浪華道楽宗なる趣味家の集まりを創始して、メンバーを三十三所の札所に擬して山号寺号を各自設けて、集印・納札交換・お御籤配布などの活動を展開した（期を同じくして〈通説では「先行」する、とされる〉、東京に同様な我楽他宗が三田平凡寺の手によって創設されている）。興行も活動写真などへ移り、刷り物も絵葉書などに取って代わられた大正・昭和初期の趣味家の活動と三十三所の係りについて検討する。

高橋好劇は『大阪人物辞典』（三善貞司編 平成十二年

十一月、清文堂）に

「たかはしこうげき 趣味人。明治元年（一八六八）大阪炭屋町生まれ。染物業を営み盛業であった。壮年期浄瑠璃に凝りやがて芝居に関する道具類や郷土玩具の収集に熱中、家業を傾けるを厭わず私財を注ぎ込んだ。また「趣味道楽宗」なる愛好サークルを作り、元旦に七福神の土人形を製作し、同好者に配った。没年不明。」

とある。

『生人形と松本喜三郎』図録解説に澤井浩一氏は、高橋好劇の記述（『あのな』第四集6月号、同集10／12月号

1927）などによって、「明治十五年」の「熊本の興行を終えて、（略）一世一代の大作である「西国三十三所観音霊験記」の人形は、遂に人手に売り渡すことにし、案内記の版木は火鉢にされた。」という。

また、高橋好劇が太夫元となって各地を興行して回ったが、おおむね「不入りに終わった。」と記述し、「大正二年は高松、岡山、姫路と興行し、これを最後に高橋好劇は太夫本の仕事をやめて西国巡礼の旅に出る。高橋の手を離れた人形は、翌年に別の人間により堺の大浜で興行され、その後は海外の収集家の手に渡ったなどの風聞が流れるのみで行方不明となった。」という。

高橋好劇（1867～1932）は、「元来芝居好きか

ら自ら好劇と名乗って居た。踊りも旨ければ絵も一寸書いた。器用貧乏で通した人だが、大阪趣味界の肝入役、世話方として東奔西走蒐集品の展覧会や趣味的遊楽にはいち鼻に商売を忘れて尽力した。頗る貴重と特行な人であった」(『上方』24号)とあり、「百物天真創業工／人形図解」と題して引いているが、典拠を「掬水庵淫(溪の誤植か)楓『あのかな』所載」とする。ちなみに掬水庵溪楓は、肥田彌一郎、「肥田家の宗家(本家)」を継ぎ、虎屋銀行、虎屋信託の取締役、大阪聚文社の監査役などを務めた趣味人。掬水庵と号し「楓文庫」を建て、個人の趣味誌『あのかな』を発刊した。」(森田俊雄氏『和のおもちゃ絵 川崎巨泉』2010・5 社会評論社)との紹介もあるが、林若樹などの集古会の会員であることは重要である。大阪の趣味家にはいろいろな集まりがあり、それぞれに七笑会や三仍会・娯美会・天愚会などの名をもつが、大阪趣味界を代表するものは、大正八年に始まる浪華趣味道楽宗である。高橋好劇は、この浪華道楽宗の開祖にして総本山梨園山好劇寺の住職で僧名を東堂然佛と称した。このメンバーは三十三所の札所に擬し、各々趣味に因んだ山号寺号をもち、蒐集品を持ち寄るなどしては工夫を凝らした集まりを定期・不定期を問わず開催した。後に壮哉小会を主宰し会誌『あのかな』を発刊した肥田溪楓とは、種々の会合で知り合いとなった

ようだが、大正五年関西納札会の発会式が催され出会ったのは大きな意味を持っていたのではないか。東京の集古会や納札連とも緊密な繋がりが出来た（関西での千社札の交換会の活況を見るに至る）。五月十四日の発会式には大坂・京都を軸に興味家が集い、高橋好劇・肥田溪楓・川崎巨泉・蘆田止水など錚々たる顔ぶれであったという。実は大正六年に高橋好劇の制作した納札交換会の絵札貼り込み帖三帖を家蔵しているので紹介するが、その前に大正・昭和を代表する趣味家のリーダーの写真を示しておく。図25、右は我楽他宗の三田平凡寺、中央が集古会の林若樹、左が浪華趣味道楽宗の高橋好劇である。下の26図は高橋好劇手製の納札貼り込み帖三帖のうちの一帖である。

図27・28は、大正6年東京の巴連故石井新の追善絵札交換会の連札などであり、いづれも梅堂豊斎、かつて四代国政を名乗っていた錦絵師の手に係るものである。

図29は、浪華趣味道楽宗の開祖にして事務所を預かる高橋好劇の手になる趣意書と各札所の山号字号・御詠歌・住職名・住所である。

図29は、上の右・配り札、中・一枚刷り縁起、左・おみくじ、下段に朱印帖（浪花贅六庵所持か）である。おみくじ・掲載朱印は、梨園山劇好寺、高橋好劇のものである。

注目すべきは、この絵札の中に大正六年「世態二十種」







祝閑西納札会壹周年」と題した東都睦会の納札が貼り込まれていることである。またその年三月に巴連の重鎮であった石井新の追善納札会が催され大坂から福山碧翠と高橋好劇が絵札交換に応じている。とくに重視すべきは、絵札の絵を担当したのが、他でもない浮世絵師梅堂豊斎、すなわち四代國政である。あの『西国順礼靈驗記』東京浅草奥山興行の絵番付を担当した浮世絵師の大正期の「姿」がそこにあった。太夫元を止め西国三十三所の旅に出て帰阪した高橋好劇の絵札をかつての「國政」が引請けたのである。

大正五・六年は、大正二年頃に「高松、岡山、姫路と興行し」、これを最後に太夫本の仕事をやめて西国巡礼の旅に出た高橋好劇が帰阪間もない頃である。この二年後の大正八年、高橋好劇が大阪に「メンバーが西国三十三所の札所に擬し、各々趣味に因んだ山号寺号をもつ」浪華道楽宗を起ち上げる。一方で三田平凡寺が東京に酷似の趣旨で我楽他宗を創設する。

通説では、「平凡寺の我楽他宗を真似た」といわれるが、発想の源（どこだわり）といつてよいか）は案外好劇の側にあったのではないかと考えている。趣味家の集まりの全国組織化をもくろんだ大阪の蘆田止水などの東上を介した動きが大正六年頃にはあったことを考慮すると、ほゞ東西相呼応した動きであった、と考えるべきであろう。生人

形『西国順礼靈驗記』興行史の変遷を考える上で今後の検討を要する重要な課題であろうが、実はこの趣味家集団には、シカゴ大学フレデリック・スターやチェコの建築家アントニン・レイモンドなど多くの欧米の人々が魅了され参加していたのである。

東京我楽他宗と大阪浪華趣味道楽宗の開創に梅堂豊斎や高橋好劇を軸に展開した生人形「西国三十三所順礼靈驗記」興行の「動向」が深く係わっていたことは、見落としがたい事実である。大正・昭和前期に盛行をみた「趣味」の世界が、巡（順）札という奥深い精神風土に幾分かは根差したところに花開いたものであり、その後の熱狂的なスタンブ巡礼へ展開していくという道筋は、ほぼ誤らないところとなろう。今また、ネット上に旺盛な拡大深化を遂げているスタンブもこれらの流れに無縁ではない、と考えてもみるのである。

ここに簡紹介した高橋好劇関連資料の詳細な紹介は、大正イマジユリー学会大会（平成三十年三月十一日於同志社大学）において、大正前期のローマ字関係資料の紹介と併せて行う予定である。別稿も予定している。

本稿に使用した図版の抛り所は、以下のとおりである。

図9左Ⅱ西田耕三氏「芭蕉と生人形」

図9下・10・11・13 フロイス堂web上掲載書影（店主の御諒解を得ている）

図15 梅原忠治郎氏『西国三十三所順拝通誌』中巻（梅原書店 昭和12年）所載図版

図25上左 藤野滋氏『我樂他宗宗員列伝』（平成19年10月）

\* \*

本稿は、2017年11月30日より12月3日まで開催された日中韓国際シンポジウム「東アジア文化交流―画像と物語―」（於韓国蔚山大学）における発表「生人形絵番付『西国順礼靈験記』をめぐる一側面」の内容に一部資料を加えて原稿化したものである。

なお、この研究は、平成28年度科学研究費・基盤研究B（課題番号26284040）の助成による成果の一部である。宋版仏書類の収集・保存・紹介などに果たした大正・昭和前期の趣味家の役割は多大であり、趣味家の埋もれた仕事の究明が宋版調査とともに今後ますます盛んになるとを願う次第である。

また、本稿は、趣味家高橋好劇が大阪の地に創宗した浪花趣味道楽宗の淵源に遡る上で必須の作業である。従って、西国三十三所札所寺院の縁起説話の研究を意図したも  
のでは、元よりない。説話研究においては、中前正志氏の前掲「近代池坊いけばな縁起追考」を軸にした一連の長大

にして精密な研究があることを明記するものである。

\* \*

初校時に北さん堂のweb上に提供された『西国順礼靈験記』の書影三図（表紙・1ウと2オの見開き。18ウと見返し見開き）を見ることができた。1ウと2オの見開きを検討すると、1ウは跋に当り、5行目に「：大坂千日前におる□□」とあり、明治十二年の「千日前興行」時のものである。2オは序に当り、紙背に透見される図柄は、明らかに十七番札所六波羅密寺の右半分と相違なく、この本は、前表紙・見返、十六番札所清水寺と跋、序と十七番札所という順に配され、最末に三十三番谷汲寺が置かれる、奥付のないもので、新しい形（興行時の形）か改装時の形（か不明）を示すことが確認できたのである。東京の浅草奥山興行時の「国政筆」版の複製を基本とした為に生じた札所の順番のズレ（変則的配置）に「苦慮」したものであることは確実である。印面の汚れ・破損など、家蔵奥付ナシ「国政筆」本と同程度の磨滅で、同時頃印と考えられる。

現状の形態から判断して（原装・改装の別を問わない）、八種の冊子型絵番付が確認できたことになる。

（まきの かずお・実践女子大学教授）